＜家庭の天使＞像と＜ニュー・ウーマン＞の狭間で——ヴィクトリア朝の女子教育論

青木　健

イギリスにおける女性の社会的地位の問題とフェミニズム運動とは密接に結びついている。さまざまなフェミニスト批評にあって、「政治としてのフェミニズム運動の実践は、1960年代であった。しかし、英米文学研究の領域においては、『屋根裏部屋の狂女』(1979) の出版が象徴的な標である」[1] とされる。サンドラ・ギルバートとスーザン・グーバーによるこのテクストが象徴的な標といわれる所以は、これをきっかけに、従来忘れ去られていた女性作家たちの作品群の復刻が積極的に進められた結果、文学研究は女性研究の地平を拡大したからである。そのため、批評理論的アプローチとともに、新たに発掘されたテクストを通して、歴史的経験主義的アプローチ（新歴史主義）が、一つの大きな流れとなって、フェミニスト批評はますますその研究領域を広げつつある。

階級制度が厳しく守られていた他に、性差が階級に関係なく存在していたヴィクトリア朝イギリスにおいて、どのようにフェミニズム運動が興り、推進されていったかは興味深く、また解明されるべき問題であろう。その実態の解明は文化的、社会的、経済的、政治的、教育的な相互関連をダイナミックな形で示すとともに、諸局面での再検証、読み直しを求めることになるからである。前述の『屋根裏部屋の狂女』の序文の中で、このテクストの狙いについて、ギルバートは次のように宣言している。「女性作家の作品に明らかに見られる一貫性は、個人、芸術、社会を戦略的に再定義することによって、社会と文学上の閉鎖的状況から自由を得ようとする女

性一般の衝動によって説明可能である。」[2] それは、男性によって定義されてきた文学史を再定義することである。このような英米文学の読み直しにみられるように、イギリスフェミニズム運動研究は、「テクストの読み直し」という作業を通して、さまざまな学問分野に影響を及ぼしている。

イギリスヴィクトリア朝の女性の地位についても、まだ実証的研究が不十分な頃に比して、その後の文献の発掘とそれらの精査によって、その発祥や由来についての従来の解釈は訂正を余儀なくされている。従来、イギリスの女権運動の由来に関しても、イギリスの工業化・産業化によって、家庭での私的な労働に従事していた女性が、自立した賃金労働者として、公的な領域で生産活動に参加して自覚した結果であると概括的に説明されてきた。つまり、女権運動の源は、労働者階級の問題にあるされていた。たしかに、工場労働における労働者階級の女性や子供の悲惨さは、種々の文献で頻繁に語られている。それは、工場法などの立法を促がし、労働者階級の労働条件の改善へとつながっている。しかし、「イギリスのフェミニズム運動は工場や炭坑からではなく、中流家庭の応接間から始まっている。」[3] つまり、ジェントルウーマンと称された、上層中産階級の女性の間からそれは興っているのである。その事実は、彼女たちが置かれた地位が法的規制ばかりでなく、社会的、経済的、文化的なしばりと複雑に絡み合っていたことを意味する。

一. ヴィクトリア朝の家庭の天使像

フェミニズム批評が切り拓いた領域のひとつに、女性を支配するために男性が作り上げたイデオロギーを暴き出す読解がある。真実とされた従来の言説に隠されたステレオタイプな女性観、社会的、経済的、政治的、教育的慣行における男性優位の因習などが、次々に攻撃の的となった。もと

もと、イギリスにおける家父長的性格は、歴史的にも古く、また社会の広範囲な領域に浸透していた。とりわけ、ヴィクトリア朝においてその性格は顕著なものとなったが、こうした状態を説明する言説の中で支配的なのは、19 世紀中頃までに中産階級の支配的文化として定着した、ジューン・パーヴィスの言う「家庭重視のイデオロギー」(domestic ideology)[4] であろう。それは、イギリスの経済機構に変革をもたらした 18 世紀後半からの産業革命と、それに続いたヴィクトリア朝の経済的成長と深く関わっていることは、衆目の一致した見解である。それは、産業と経済を担った中産階級において著しかった。工業化前の時代に家族が共有していた経済的機能は、しだいに崩壊してゆき、中産階級女性の生活の諸条件は、大幅な変更を余儀なくされた。「土地と関係のない、あるいは家庭から離れた場所を本拠地とする男性の職業が増える一方で、女性は、社会的な生産活動の場から除外され、主婦は否応なしに夫から孤立した生活を送らねばならなかった。」[5] 経済的単位としての機能がこのように弱まったのに伴い、家庭は新たな意味を帯びるようになり、「家庭は城」という概念が作り上げられた。同時にそれは、社会の家父長的性格と相俟って、男女は領分を別にすべきという考え方を中産階級に植え付けた。男子が職業や政治といった公的領域に関わるとすれば、女性は家庭と家族という私的領域に関わるものするイデオロギーが、中産階級に支配的になったのである。

上昇する経済力を背景に、中産階級は、上流階級のモードを志向するとともに、独自の生活様式の基盤を家庭に求めた。彼らは、社会的評価を得るために、繁栄のシンボルとして「パラファネイリア」(paraphernalia) を豪華に装備した——広大な屋敷、きらびやかに飾った部屋、とりわけ夫人の部屋を飾ったさまざまな調度品や装飾品などの物質的諸道具、多くの家事使用人、乳母及び子女の教育に携わるガヴァネスなどの人的配置、さらには外国での長い休暇、パブリックスクールからオックスブリッジへの息

子の教育、友人・知人を招待しての豪華なパーティ。それらはすべて「リスペクタビリティ」(社会的体面) を保持するための「装置」であった。[6]

この中産階級の家庭の理想を完結させるものが、既婚女性の生活様式であった。家事一切を使用人に、育児を乳母に、子女教育をガヴァネスに任せて、ほとんどすべての主婦の仕事から解放された夫人は、多くの閑暇を持つこととなった。妻が多くの閑暇を持つこともまた夫の社会的・経済的地位を証明することであったから、一家の男性はむしろそれを勧め誇示した。しかし、有閑女性の活動は、男性の社会的評価の妨げにならないものに限定され、女性の仕事と言えば、家庭の取り締まり、使用人や子供の監督の他には、慈善的活動や教会での行事に参加する程度であった。特に、有給雇用は男性の体面を汚すものとされ、経済的に男性に依存することが理想とされた。娘は父親に、妻は夫に、未婚の女性は兄弟に扶養されるのが、この階級の女性の生き方とされた。このような社会的背景の中で、いわゆる＜家庭の天使＞像は定着したのである。

＜家庭の天使＞像は、さらにキリスト教、とりわけ、18 世紀以来の福音主義、ユニテリアンやクウェーカーなどが主張した世俗的なキリスト教の教義と結びついて、一段と強固なものとなった。[7] この概念は、男性側からの一方的な強制ではなく、女性の側からの賛同によってもその定着を増幅させた。いわゆる「淑女の手引書」(conduct books) は、さまざな装いをもって、上層中産階級の有閑女性たるジェントルウーマンのために、ジェントルウーマンの手によって多くが書かれている。しかもそれらは、ヴィクトリア朝の特定の時期に偏らず、30 年代から 60 年代後半に至るまで間断なく出版されている。内外の研究者は、それらに書かれた、女性の役割に関する言説を精査し、それらから掬い取られた共通項を考察している。例えば、川本氏は二つ、ジューン・パーヴィスは三つあげている。九つの「手引き書」を精査した川本氏によると、それらに見出される共通項の一

つは、「女性の使命が、娘・妻・母という三つの性役割においてとらえられていること」だという。[8] 女性の役割が、息子・夫・父としての男性との関係において規定されており、娘・妻・母以外の役割は期待されていないということは、女性の使命と存在とは、家庭とのしばりの中でのみ意味を持つ相対的な存在であり、自立した存在ではないという考え方である。

パーヴィスも、サラ・エリスやサミュエル・スマイルズの見解に基づいて、女性の相対性と依存性について論じている。エリスが、「実際、女性は生まれつきの体質からしても、またこの世での地位からみても、厳密な言い方をすれば、相対的な生き物なのです」と述べている点をとらえ、パーヴィスは、そこに女性の宿命的な位置付けをみている。スマイルズは、「女性は、母、姉妹、恋人、妻というそれぞれの関係において、ある時は幼子の養育者であり、ある時は子供の教師であり、またある時は青年の指導者と相談者を兼ね、さらにまた男性にとっての親しい友であり伴侶である」と女性賛美を仄めかしながら、女性の相対的な性格を指摘している。[9]

エリスが、「女性は------相対的な生き物なのです」と言った時、パーヴィスが指摘する第二の共通項、つまり女性と男性との間には「生物学的な差異がある」として、サラ・ルイスが『女性の使命』(*Women's Mission,* 1839)で唱導した女性論を彼女は意識したと思われる。ルイスは、女性が持つすばらしい影響力は、「自然の回路、すなわち家庭に導き入れられた時」、最も恵み豊かなものになろう、と言って本来的で生物学な男女の差異を主張する。

川本氏が指摘したもう一つの共通項、「女性が男性に劣る存在としてはっきりと規定されている」点は、パーヴィスも論じている。[10] 女性は、個人的才能はどうあれ、「女性という性に属するだけで、問題なく男性に劣る存在」であるというものである。女性が男性よりも劣るということは、女性が男性に従属すべきものという考え方に連結する。この考え方は、『イ

ングランドの女性』(*Women of England*, 1839)、『イングランドの娘』(*Daughters of England*, 1842)、『イングランドの妻』(*Wives of England*, 1843) と立て続けに「淑女の手引き書」を著したサラ・エリスの著作に、一貫して流れている女性論である。

女性自身による「手引き書」に加えて、男性からも、同趣旨の女性論が1860 年代にもにぎやかに論じられている。1865 年に世に出たジョン・ラスキンの『胡麻と百合』(*Sesame and Lilies*) でも、性差に基づく女性の義務、それに即した女子教育、そして女子の社会的任務について、ルイスやエリスたち以上に女性の影響力を力説している。そこに表わされた女性像は、コヴェントリー・パトモアが 4 部からなる長編連作詩『家庭の天使』(*The Angel in the House*, 1854-62) で謳った、結婚生活の神聖化へと続くものであった。このような女性論は、女性、男性を問わず、ヴィクトリア朝後期にまで行き渡った言説ということができる。

しかし、パトモアが清らかに謳い上げた家庭の天使像への疑問はなかったのであろうか。言いかえれば、フェミニズム運動の動機となったものは何であったのか。女性の隷属に対する反撃ののろしは、周知のように、既に 18 世紀末にメアリ・ウルストンクラフトによって唱導されていた。しかし、彼女の『女性の権利の擁護』(*A Vindication of Rights of Woman*, 1792) は、純粋に思想的なものであって、具体的に参政権とか雇用の問題と結びつかなかったため、具体的な運動へと連結しなかった。後述するように、むしろ、彼女は 18 世紀の「ブルーストッキング」派の女性たちと同一視され、同性にも否定的に見られたから、彼女の議論は女権運動へとつながらなかった。工業化以前には、たとえ法的に不平等な規制があったとしても、女性は経済的有用性において、男性と平等であるという意識に支えられて、焦燥感はそれほど強くなかったからという説明も成り立つかもしれない。

女権運動への道のりは遠かったにせよ、それは、徐々に顕在化してくる。

1855年から三度にわたり、既婚婦人財産法実現に向かって努力したバーバラ・ボディションや、『自叙伝』(*Autobiography*, 1877) の中で、自らの体験から女性の隷属に反対し、女性の権利を主張したハリエット・マーティノー、あるいは『女性の隷属』(*The Subjection of Women*, 1869) の中で、「[女性の隷属状態は]来るべき時代には消え去らねばならない過去の遺風」[11]として、男性の立場から女性の権利を主張したJ. S.ミルなどがいる。しかし、これらの知的な思想は単発的であり、一気に社会的な変化へとまではつながらなかった。それは、社会的に認められた活動を伴って初めて、実現の方向へと進む種類の変化であったからである。その意味では、ナイティンゲールの看護婦制度導入運動は、実践的な活動に支えられていたため、速やかに社会的認知を得たと思われる。

ナイティンゲールの看護婦制度導入が成功したのは、実践的な活動の他に、社会的な要請があったことも重要な要因と思われる。野戦病院での患者・負傷者への看護は、異論を挟む余地がないほど、国家にとって必要不可欠の要請であった。女性の有用性は、それほどの強い社会的要請はなかったから、一部のジェントルウーマンたちが抱いた焦燥感は、表面化しないだけに奥深く浸潤して行った。河村氏によれば、「[中産階級の女性における]有用性の喪失意識は、運動としてのフェミニズムが生み出される上で、潜在的要因となったということは言えそうである。だが、その有用性の喪失意識に------ジェントルウーマンの貧困の問題、そして女性の数の過多の問題が、恐れとなって加わって初めて、フェミニズムへの足がかりが作られた」[12]という。社会的労働はもちろん、家事や・育児の拘束から解放された中流階級の有閑女性がいる一方で、同じ地位にいながら不幸にも職に就かざるを得なかったジェントルウーマンの数は、予想をはるかに上回っていたことは、さまざまな資料が明らかにしている。そのような立場のジェントルウーマンの典型がガヴァネス(女家庭教師)であったことに異論はない。

二. ガヴァネスと女子高等教育

過剰な女子の人口という社会現象と、ヴィクトリア朝のガヴァネスのつながりについては、内外の先行研究が諸局面をとらえて明らかにしている。男性と女性の人口比率についての社会学的統計、ヴィクトリア朝の文学作品に、ガヴァネスとして描かれたヒロインたちを対象とした「ガヴァネス文学」研究、『パンチ』をはじめ、主要なジャーナルでのガヴァネス論争を中心とした歴史的研究、フェミニズム運動や女子教育研究の一環としてのガヴァネス研究等々、ガヴァネスに関する研究は、社会学・歴史・教育・文学の各研究分野で行われている。ガヴァネスの問題が 19 世紀に急に浮上した理由として、ジェントルウーマンの経済的困窮が指摘されている。W. F. ネフは、19 世紀初頭から第一次選挙法改正までの経済的混乱の原因を、バブル的経済の膨張、それに対応しきれない信用制度の破綻による銀行の倒産といった、社会的な金融制度の不備などに求めている。[13] また、女性の人口が、男性のそれをはるかに上回ったことによる「余った女」(surplus women) の存在、とりわけ増加する中産階級の独身女性は、『パンチ』などの雑誌によって風刺的に扱われるほど社会問題化していた。J.A. & Olive バンクスによれば、1851-71 年の 20 年間に 15 歳以上の女性数は 42 %増加し、独身の男女の数の差は、女性の方が 1.7 倍多かったという。理由として、男子の幼児死亡率の高さ、適齢期の男子の海外派兵や海外移住、あるいは男子の晩婚の傾向などがあげられている。[14]

ではなぜ、この「余った女」が、ガヴァネスと結びつくのであろうか。女性の唯一の就職が結婚であったことは、ジェーン・オースティンの『自負と偏見』の冒頭でベネット夫人が漏らす言葉に象徴的に表れている。しかし、それが叶わず、財産を持たず、家庭を持たない女性、あるいは父親の不測の死や事故によって突然経済的困窮に陥り、しかも労働者としてで

なく、ジェントルウーマンとしての「体面」を保持しながら働くことができた職はそう多くなかった。特別な才能を必要とした文筆業にも少数の女性が存在していたが、ジョージ・エリオットの例のように、それを職業とするためには、男性のペンネームで押し通さねばならなかったし、また、ブロンテ姉妹が自分たちの作品を世に出すまでの忍従は、英文学史が教えるところである。ガヴァネスという職は、その意味でも、ジェントルウーマンの適職であった。

本来、上流階級の慣行であったガヴァネス雇用の需要が増した点について、M. J. ピーターソンは、経済的・社会的な力を得た中産階級が、貴族の慣行を模倣するようになった結果であるとしている。[15] いずれにせよ、ガヴァネス雇用は上流階級のみならず、豊かな中産階級にまで拡大していった。しかし、需要が増したとは言え、それは供給をはるかに下回った。また、需要と供給のアンバランスの他に、ガヴァネスの質の問題もあった。元来、ガヴァネスに要求された要件のうち、出身が雇用者と同等以上の階級であること、子女を嗜みのある女性に教育する、つまり 'accomplishments' を教えることができる教養の持主であることが重要であった。ガヴァネスに対する要求は、このように、ハードルは決して低くなかったが、現実はどのようなものであったのであろうか。ガヴァネスはどのような教育を受けて、子女の教育に携わったのであろうか。ヴィクトリア朝の小説には、ガヴァネスとして登場するヒロインのさまざまなレヴェルの能力が描かれているので、その若干の例をまずみてみよう。

「教育経験を持つ若い女性（私は 2 年間も教師を勤めていたのだ）、14 歳未満の子女を持つ家庭に勤め口を求む。（私はやっと 18 歳になったばかりだったので、自分の年齢に近い生徒の教育を引きうけるには荷が勝ちすぎると思ったからだ。）当方、正式な英国教育の普通科目の他

に、フランス語、絵画、音楽を教える資格あり。」[16]

『ジェーン・エア』のヒロインは、ガヴァネスの職を求めて、以上のような新聞広告の文案をつくった。これをきっかけに、彼女はロチェスターとの運命の出会いが待つソーンフィールドへと赴くわけだが、ガヴァネスとしての資格は充足されていたのであろうか。まず、彼女の出自に関しては、孤児という境遇が十分要件を満たしているとは思えない。『虚栄の市』のジョージ・オズボーンは、「彼に色目を使っているあの小さな女学生は誰だい、家庭教師ならまあいいさ、でも僕は自分の義理の姉になる人には、ちゃんとしたレディであって欲しいんだ」[17] と言って、ベッキー・シャープの出自を疑問視している。ガヴァネスは、単にレディらしい教養と立ち居振舞いを持ち合わせた女性というだけでなく、出身をも問題にされたのである。

さて、ジェーンの教養についてはどうであろうか。「正式な英国教育の普通科目」の他に、「外国語、絵画、音楽」が教えられると彼女は自負している。後述するように、ジェーンが受けた教育は、ガヴァネス教育の標準を行くものと思われる。一方、『虚栄の市』のアミーリアとベッキーが卒業した、チジックの女子寄宿学校長ミス・ピンカートンは、二人の教え子の素養について次のように紹介している。

> 両嬢ともにギリシャ語、ラテン語、及びヘブライ語の基礎、数学と歴史、スペイン語、フランス語、イタリア語、及び地理を教え、音楽は声楽と楽器を、また舞踊も専門家の補助なしで指導でき、自然科学も初歩程度は教えることができます。それに、両名とも、地球儀を使って指導することに熟達しております。[18]

ダニエル・プールが言うように、これほどの教育を受けた家庭教師はあまりいなかったと思われる。『ドンビー父子』のブリンバー博士の男子の寄宿学校では、詰め込み教育で数種の古典語を教えているが、ガヴァネス養成の学校では、古典語はせいぜい一種類が普通であったであろう。プールは、「多くのガヴァネスは、『ミドルマーチ』のミセス・ガース程度のものであったろう」と言っている。それは、「リンドリー・マーレーや、マングノールの『質問集』に精通していた」という程度ではないかという。因みに、後者は、理解力に欠ける家庭教師が切羽詰って暗記した、歴史その他に関する問答形式の本であった。[19]

中産階級以上の階級の出であり、淑女の嗜みがあったとしても、ガヴァネスは他方で、給料は召使いたちのそれとあまり差はなかったため、家族のなかでは部外者でも、部内者でもない、どっちつかずの立場にあった。したがって、ジェントルウーマンの多くが、この職業を積極的に選んだわけではないようである。文学作品の中でも、女性自身ガヴァネスになることに積極的な姿勢を取る者は少ない。『エマ』のジェーン・フェアファックスは、家庭教師になろうと考えてはいるが、ロンドンの「オフィス」(斡旋所) に行くのをためらっている。また、『ミドルマーチ』に登場する自立心の強いメアリ・ガースは、気難しいピーター・フェザーストーンの世話をしていたが、それは「ガヴァネスになるよりはその方がましだった」からである。召使たちの方でも、ガヴァネスを快く思っていなかった。『虚栄の市』で、セドレー家の女中頭ミセス・ブレンキンソップは、「あの女たちはレディ気取りで威張っているけれど、お給料はあんたやあたしとたいして違わないのよ」と言って反発を露骨に示している。

文学作品に描かれているガヴァネスの多くは、このように否定的な面が強調されているが、ジェーン・エアやデイヴィッド・コパーフィールドの母親のように、ジェントルマンの雇い主の目にとまり、孤児の境遇から上

流階級や上層中産階級への階段を登る、幸運なガヴァネスもいたことも事実であったようである。それは、ガヴァネスに対する社会的評価が一定せず、矛盾を孕んでいたことと無関係ではない。M.J.ピーターソンによれば、「中産階級によるガヴァネス雇用は、ヴィクトリア朝社会の価値を補強し、永続化させるのに役立ったが、一方で、レディたるジェントルウーマンを雇うことには、雇われて彼女が充たすべき価値そのものとの矛盾が内包されていた」[20] という。それは、ガヴァネスの位置に対する定義が、当時から曖昧であったこととも関連しているようである。ピーターソンは、E.M.シュエルや E.R. イーストレイクらのガヴァネス論を精査し、その曖昧さを指摘している。[21] ジェントルウーマンとは、元々賃金のために働かないことが社会的地位の保証となっていた。ガヴァネスは、ジェントルウーマン出身でありながら賃金を得るという点で、矛盾していたが、さらに、引きうけた子女の教育の目的は、ジェントルウーマンの資質を育成することであった。ガヴァネスがその事例の一つであることは、そのままガヴァネスの社会的地位が孕む矛盾でもあった。

19 世紀に入り、数を増したガヴァネスは、彼女を召使や馬車などの「パラファネイリア」と同一視する中産階級の家庭に雇われたが、それは、彼らにとりガヴァネスは経済力、出自、地位を誇示するための道具に過ぎなかったからである。しかし、他方で母親の役目であった子女の教育、特に娘の教育を任されたから、その権威は、他の召使いとは一線を画すものであった。それでいて、給料を得ることによって、賃金労働者として召使いと同一の扱いを受けた。「賃金のために働くことは、ジェントルウーマンとしての社会的地位を失うことだ」とする社会的評価と、それは矛盾するものであった。

この矛盾にもかかわらず、ガヴァネスの地位が社会的評価を著しく低下させなかったのは、妻や母親の義務であった家庭の中での子女の教育に携

わったからだという。さらに、彼女らは、本来生まれも育ちも良いジェントルウーマンが、何らかの不幸に遭遇した結果であるとみなされ、同情の目で見られたことも、ガヴァネスの供給が低下しなかった理由とされている。ピーターソンはさらに、ジェーン・エアのように階級の梯子を登り得る機会も用意されていたため、娘をガヴァネスにするという下層中産階級の思惑さえあったと述べている。[22]

しかし、ガヴァネスの現実は厳しいものであった。まず、給与について。ピーターソンは、バンクス夫妻の研究とマーティノーの記したデータをもとに、ガヴァネスの平均年収を 20 ポンドから 45 ポンドとしている。この額がいかに低いかは、召使いの額と比較すると明瞭である。

(単位はポンド)	バンクス、1848-52	マーティノー、1859
家政婦	データなし	40－ 50
料理人	15－ 16	12－ 18
女中	11－ 13	10－ 14
子守り女	11－ 12	5－ 30[23]

優秀なガヴァネスは執事と同等の年収があったというが、その中から衣装代、医療費、旅行費、クリーニング代は自弁、さらには失業や老後の貯えもということになると、手元にはほとんど残らなくなるのが実情であったろう。1844 年、作家チャールズ・ディケンズは、ガヴァネスの窮状を次のように訴えている。「[ガヴァネスが授ける] 知識は、社会的に正当な報酬を受けていないのです------例をあげて、召使や奉公人の報酬と彼女たちのそれとを比較してみましょう。彼女たちの報酬は料理人より低く、執事の

それには比べものにならず、小間使いのそれに近く、お仕着せを着た従僕のそれより低いのです。」[24]

その一方で、彼女たちの仕事はハードなものであった。雇い主は、子女が道に迷わぬようつきっきりで監督することを要求し、自由な時間を制約したし、さらに苦痛なことは、子供のみならず、母親との軋轢があった。[39] それは、ヴィクトリア朝の社会生活を内部から見つめる材料を作家に提供し、家庭のドラマをより豊かなものにした反面、現実の当事者は、社会的立場の矛盾、雇い主との軋轢、失業や老後の不安の他に、家庭外では、ガヴァネス職に対するさまざまな社会的評価とも闘わねばならなかった。それには、ジェントルウーマンとしての体面を維持するために、ガヴァネスという立場を極力隠蔽すること、また、セクシュアリティの欠如を強調し、いたずらに雇い主との間にトラブルを起こさないことなども含まれていた。ピーターソンは、理想的なガヴァネスの要件の一つに、「質素で、厳しく、セクシュアリティの欠如」[25] があったと言っている。

ガヴァネスが陥った矛盾を速やかに解決するには、結婚によってこの職を去ることだが、「余分な女」が過剰な時代にそれは無理であったし、資力のないガヴァネスが縁者に加わることへの反発を乗り越えることも困難なことであった。＜ニュー・ウーマン＞[26] への反発をあらわにしていたエリザベス・イーストレイクは、ガヴァネスの海外雄飛を主張しているが、それはガヴァネスが移民となることであり、イギリス社会での市民権を放棄することを意味していた。[27] 逆に言うなら、ジェントルウーマンが社会的体面を保持するためには、そこまでの決意が必要だということである。

ガヴァネスの問題は、ヴィクトリア朝を通じてしばしば社会問題として取り上げられていたが、その理由の一つは、報酬からみた教育職の社会的評価の低さからきたものであった。しかしこの問題は、ヴィクトリア朝における女子教育、さらには女子雇用の問題と結びついたことから発展性を

含んでいた。その象徴的なものが、1843 年に創設された「ガヴァネス互恵協会」(Governess Benevolent Institution) である。この協会は、ガヴァネス職の斡旋、老齢のガヴァネスのための年金問題、さらには彼女たちのための一時的な宿泊施設の提供などを目的としていた。[28] ガヴァネスが置かれた環境は、このような協会設立が必要なほど緊急のものであったことが分かる。協会を立ち上げて 1 年後、募金をアピールするために晩餐会が開催され、前述したように作家チャールズ・ディケンズは来賓スピーチで、教育の社会的重要性を力説し、それに見合う報酬がガヴァネスに対してなされないことへの不満を訴えている。この協会がどの程度実効があったかはにわかには判断できないが、少なくとも女子教育の問題への契機となったことは大きな収穫であった。すなわち、このガヴァネス互恵協会から発展して、1848 年にクィーンズ・カレッジ (Queen's College) 開校が実現し、さらに、これに刺激されて翌 1849 年にはベッドフォード・カレッジ (Bedford College) も創設され、ジェントルウーマン教育、そして女性の高等教育への道が用意されることになったからである。その間の経緯は河村氏の『イギリス近代フェミニズム運動の歴史像』に詳述されているので、ここでは、開校に深く関わった F.D. モーリス自身が述べた、クィーンズ・カレッジ創設の目的を精査することによって、女子教育の位置付けを検証してみたい。

クィーンズ・カレッジの創設に関わったモーリスは、キリスト教社会主義を標榜した聖職者であり、ロンドン大学キングズ・カレッジ教授でもあった。彼は、クィーンズ・カレッジ開校にあたり、その目的と狙いを語りながら、具体的な教授法と教科目を提示する。まず、ガヴァネス互恵協会設立からクィーンズ・カレッジ創設の経緯について語った後、次の世代のガヴァネスに、現在より良いポジションを得させること、また、「その資質を高める教育機関の必要性を認識し------彼女らの教育と能力を試験する

ための委員会の設立」[29] を検討したと述べており、クィーンズ・カレッジの初期の目的が、ガヴァネス教育であったことがわかる。ガヴァネスという職業への社会的評価を高めるために、まずガヴァネス自身が「自尊心」(self-respect) を持つべきである。したがって、「ガヴァネス教育に要求されるのは、単に教授法の技術だけでなく------教える内容の明確な把握とともに、教える児童との心理的一体化」[30] であるとして、精神面の重要性を指摘し、さらに、社会的に評価される具体的な方策として、試験の合格者には「免許状」(certificate) を授与することになった事情を述べている。

では、どのような教科目が準備されたのであろうか。最初に、「淑女の才芸」(accomplishments) の適切性について論じられる。従来、女子教育の重要な目的が 'accomplishments' 修得にあったことを認める一方で、モーリスは、将来的には「現実的で、能力のある教師の育成を目指す」以上、具体的な教科目の学習が優先されるべきだと説く。そこで最初に言及されるのが、「図工」と「音楽」である。これらの教科を学習する目的として、モーリスは 'accomplishments' の必須科目であったことを認めた上で、さらにそれらの有用性を新たな見地から分析する。「[音楽と図工とは] 自然と人間を見る目、表面下を深く見る目を育てる」[31]、つまり、観察眼や識別力を養うと言う意味で有益な教科であるとしている。特に音楽は、「秩序と調和の感覚」(sense of order and harmony) を養う上で大切な科目であり、単に 'accomplishments' として、その技能の修得にのみ力を注ぐのではなく、「学習者の心と理解力を養い、音楽が持つ力と原理原則の受容能力を高める」ことが音楽学習のポイントであると力説する。音楽学習は、従来のように単に「優雅な装飾」(an ornamental grace) であってはならず、「実践的な人間教育」の重要な教科目と位置付けられる。'accomplishments' の必須科目を新たに意味付けることにより、従来の「淑女の嗜み」以上の意味をそれらに付与することで、科目の重みを増そうとしている。

'Accomplishments' のもう一つの科目、算数を学習する意味は「ただ数の法則を知り、日常生活上の有効性」をのみ目的にするのではなく、その学習を通して「世界の法則を学び、精神と人格の養成」を目指していると、議論を精神論へと向けてゆく。また、「数学」(mathematics) を導入したことを指摘し、このカレッジを「淑女の嗜み」のための機関に終らせず、一段上のランクの女子高等教育との結び付きを強調する。しかし、その専門性については、否定的であり、あくまで基礎的な学習を求めている。それでも、「現存する世界の状態を瞥見できる」としている。「現存する世界」の理解に資する科目は、さらに「自然科学」(Natural Philosophy) であるが、これも数学同様、基本を学び「自然の秩序と生きた事実」に触れるだけに留めるべきであるとしている。全体に、自然科学は専門的な科目であり、むしろ男子の学習領域であるというのが、後述するように当時の一般的な考えであった。

自然科学系の科目に対して、その重要性を指摘されていたのは語学である。『虚栄の市』で描かれたミス・ピンカートンの女子寄宿学校でも、「スペイン語、フランス語、イタリア語」などの現代の外国語の他に、「ギリシャ語、ラテン語さらにヘブライ語」などの古典語が教授されていたことが仄めかされている。一方、ディケンズの『ドンビー父子』のブリンバー博士の男子寄宿学校でも、それらが重要な科目となっていることは触れたが、前者は比較的穏やかに、後者ではその非能率性が鋭く風刺されている。では、外国語に対するモーリスの姿勢はどのようなものだったろうか。まず、フランス語、イタリア語そしてドイツ語が三大現代外国語として奨励されている。それらの学習を通じて言語の異なる局面を理解し、言語の基本的原理の習得を期待するとしている。とりわけ注目を引くのは、文法の重要性である。言葉の法則に習熟させ、言葉の正しい用法と同時に語源や言語の発展に対する知識によって、学習者の思考能力を養成する上で、文

法学習の意義を強調する。そのような姿勢は、正しい英語の発展というだけでなく、専門的な知識による弊害から学習者を守るという。

言語習得には、さらにラテン語の習得が奨励される。それは、'accomplishments' として身につけるというより、英語それ自体の十全な理解に欠かせないからだと言う。言語に関しては、英文学の知識も重要であり、偉大な作家としてシェイクスピアやミルトンがあげられる。また、文体や朗読の模範としてアディソン、ジョンソン、バークらの作品があげられている。「一般に女性がラテン語やギリシャ語を学んだりすることはなかった」[32] 19 世紀初頭に比べ、クィーンズ・カレッジの教科目は、女子が受ける教科目としては、一段と進んだものとなっている。事実、『ミドルマーチ』(1871-2) のヒロイン、ドロシアにとっても、古典語は「男性的知識の領域」に属するものと思われていた。1869 年のある「淑女の手引書」でも、「男性は女性の前で古典の文句を引用してはならない。もし引用したときは、謝罪するか、それを翻訳してやらねばならなかった」[33] という。モーリスが語るクィーンズ・カレッジの教科目は、続いて「歴史」と「地理」を加えることによって、ミス・ピンカートンの女子寄宿学校での学習科目にほぼ匹敵することがわかる。

モーリスが最後に掲げる教科目は、神学、とりわけ聖書の精読である。これは、彼が聖職者であった（リンカーンズ・インの礼拝牧師という肩書きで講演している）ことと関係しているであろう。クィーンズ・カレッジ創設に参画したもう一人の有力な人物、チャールズ・キングズリーもまたキリスト教社会主義者であった。因みに、1849 年にベッドフォード・カレッジが開校された裏には、運営組織に男性を加えず、女性のみで運営すべてを実施するという他に、クィーンズ・カレッジと違って英国国教会の影響を避けるためともいわれている。ベッドフォード・カレッジが、後年ロンドン大学に組み込まれたのに対して、クィーンズ・カレッジが大学の地

位を得ることがなかったのは、宗教色を極力薄めたロンドン大学の方針と相容れなかったからとされている。[34]

しかし、具体的な教科目を提示することによってモーリスが目指した女子教育は、将来の教師の育成という「師範学校」的な色彩と「淑女の教育」との混交という、どこか割りきれないものである。1855 年に再びモーリスは、クィーンズ・カレッジの教育目標を公けにしているが、その時は、既に女子のためのカレッジはロンドンだけでも 3 ヶ所あり（ハーリー・ストリート、ベッドフォード・スクェア、ハイドパーク）、相互に牽制し合っていた風であり、教授法の他に新たな面として、ナイティンゲールの看護婦のような補助的役割に徹した社会的貢献を、教育目標の一つとして推奨している。この時点では、初期の目標であったガヴァネス教育を越えて、ジェントルウーマンの社会的役割の拡充が認識されていたことがわかる。

創設者モーリスの言葉を通して、クィーンズ・カレッジにおけるジェントルウーマンのための女子教育の姿を検証したが、カレッジ創立の目的と実際の教科目との間には、亀裂が見え隠れしている。しかし、初期のカレッジを卒業した女性の中には、将来女子教育に貢献した者、学者となった者、女権運動のパイオニアとなって女性参政権運動家となった者など、女子のカレッジが果たした役割は無視できないものがある。本格的な女子教育に接した受講生たちが、感激を持って授業に出席していた様子を示す事例が残っているのである。後に女性校長として中産階級の女子の教育に携わることになるフランシス・M・バスは、クィーンズ・カレッジ時代を、「知的な意味において、私の人生を切り開いてくれた」[35] と回顧して当時の教育体験を賛美している。

クィーンズ・カレッジの開校がガヴァネス教育から出発して、女子教育の発展、さらには女性参政権などのフェミニズム運動の契機となるまでには、まだ遠い道のりがあった。とりわけ、女性を取り巻くヴィクトリア朝

社会の女性観は、一朝にして変わることのない牢固としたものであった。それは、いわゆる＜ニュー・ウーマン＞として社会的な役割を果たそうとする女性の進出を阻んでいた。＜ニュー・ウーマン＞が、社会的進出を目論む女性を指したことは明らかである。それは、「人種・階級・ジェンダーの序列化を拒む」[36]といった、物語世界の登場人物の激しい生き方からは程遠いものであった。ジェイムズ・デイヴィスは＜ニュー・ウーマン＞批判を『クォータリー・レヴュー』誌上で繰り返す際、そのような女を「ブルーストッキングと呼ばれたい淑女」と好んで呼んでいた。[37] パーヴィス自身、女性の大学教育への道程を論じる中で、＜ニュー・ウーマン＞の理想像を、「専門的教育を受け、夫に扶養されずに経済的に独立した独身のキャリア・ウーマン」と称し、その条件として「男性と同一の科目を学び、有給の専門的職業につくこと」としている。反フェミニスト、反女性参政権者のサラ・シュエルは、女性の高等教育への反対意見を声高に述べた時、そのような女性をやはり＜ニュー・ウーマン＞と呼んでいる。[38]

パーヴィスは、女性の大学教育参加へのきっかけを、「ケンブリッジ大学の公開講座」への参加に求め、その困難で厳しい環境との闘いの経緯を、具体例をあげて精査しているが、それは、＜ニュー・ウーマン＞という蔑称との彼女たちの闘いでもあった。女性の高等教育要求を阻んだ社会環境については、既に先行研究がさまざまな見地から検討を加えているので、ここでは1830年代後半から60年代後半に至る間に書かれた、ジェントルウーマンのための、ジェントルウーマンたちによる教育論を精査することによって、ヴィクトリア朝の女子教育論に垣間見られる、＜ニュー・ウーマン＞たちに設けられた障壁の高さとその実体を追ってみたい。

三. 女子教育論にみる女性像

1. エリザベス・サンドフォードのジェントルウーマン像

1839 年に発刊された、『社会と家庭における女性の性質』(*Woman, in her Social and Domestic Character*) の中で、比較的自由主義的な聖職者の妻として、サンドフォード夫人 (Mrs. Elizabeth Sandford, ?-1853) は、キリスト教精神に即した女性論を展開する。彼女は、この世のあらゆる基準はキリスト教の教義に準じるものであり、したがって、女性の理想像もまた、聖書に描かれた女性像に見出されるとしている。

> アブラハムの妻からアクラの妻に至るまで、自分たちの従属的な地位を忘れたり、そこから逸脱した妻は一人としていないし------我々が耳にするのは彼女たちの信仰、敬虔、無私そして忍耐なのだ------我々が目にするのは、教えに対する彼女たちの尊敬の念、優雅な服従、定められた義務の忠実な履行のみである------服従は、女性の義務であるとともに神への義務である。[39]

女性の進む道は、神が定めたものと決めているサンドフォード夫人は、そのような決定論的議論を、女性と家庭とのつながりへと転用する。冒頭で「女性が何らかの影響を与え得るとすれば、それは、家庭である------家庭の平和ほど男性を活性化させるものはなく------そのような家庭をつくりあげるのは女性であり、そこにこそ、女性の本性と有用性がある------女性は、社会的義務を果たす上で模範となるべきであり、両親には忠誠を誓い、夫には献身的に仕え、子供たちには愛情深く接すべきである」[40] としている。この理念は、家庭の天使像をなぞるものであり、「淑女の手引書」の内容そのものと言ってよい。したがって、彼女の女性像は、徹底して家庭重視

イデオロギーに染まったものとなっている。

女性がとりわけ称揚される徳目は、「忍従」(subjection) であり、「貞節」(chaste) であり、「自己犠牲」(self-sacrifice) である。否定されるのは、「ブルーストッキング派」に見られたような、知識を振りかざす議論好きの「攻撃性」(aggressiveness) であり、「高慢」(pride)、それに「野心」(ambition) などであり、でしゃばること、エキセントリックで過剰な情熱もまた否定される。その他、女性の弱点とされる性質——虚栄、判断力の欠如、精神力の弱さ、空想癖、等々——をあげるとともに、男性の性質や能力との差異を強調し、女性劣等論を強調する。他方、肯定される性質は、その裏返しの性質であるが、それらはすべて男性を支えることと結びついており、否定的資質は男性を苦しめるものとされる。とりわけ、忍従と自己犠牲は、挫折した男性を愛情豊かに支え、希望へとつなげるとする言説は、G.E.ヒックスの絵『女性の使命・男性の伴侶』(1866年) を髣髴させる。これらのキーワードを駆使しながら、最終的にサンドフォード夫人は、理想的女性像をキリスト教の教義に求める。このように、彼女の女性像の特徴は、福音主義の影響を色濃くにじませたものとなっている。

では、そのような性質を生来持った女性に、どのような教育をほどこすべきだと言うのであろうか。サンドフォード夫人は、まず女性の教育への関心が高まったことを、社会の文化的レベル上昇の証であるとした上で、女子の教育にいたずらに期待をかけてはならないとしている。なぜなら、「男女の間にはそれぞれの異なる特性があり、それを破壊する教育は愚かしく、無意味なものである」と言う。したがって、女子の教育は「女性特有の性質が考慮される必要」があり、いたずらに知識を詰め込むことは、自己満足ひいては尊大さを植え付ける結果となる。女子教育の本質は女性としての本性を維持しながら、「理性を活性化し、精神や知性を発展させること」である。ということは、教育内容も、当然男子のそれと異なるの

が自然であり、女性としての義務と責任とが絶えず配慮されたものでなければならない。教育の実践は、機械的な知識の習得でもなく、才能を飾り立て、他者との競争に打ち勝つためでもない。女子教育の目的は、「人格形成であって、単なる知識の習得ではない」以上、女性にとって重要なのは、「人間性そのものであって、知識そのものではない」。たとえ、豊富な知識を習得したとしても、それを女子教育の主目的に応用する能力が女性に付随しなければ、無意味なものになるという。[41]

女子教育の主目的とは何か。サンドフォード夫人によれば、それは、キリスト教精神に即して、女性の本来の義務を果たす心構えを育成することであり、その義務は、社会的なものと家庭的なもの、両方に通じるものでなければならない。人間行動のあらゆる原点は、キリスト教にあり、その具体的な実践は聖書に基づく以上、そのプリンシプルに即したものでなければならないとするのが、彼女の女子教育の理念となる。

キリスト教との密接な関係を女子教育に持ちこもうとするサンドフォード夫人の女子教育論は、具体的なカリキュラムや教科目への言及がなく、教育論というより、上層中産階級の女性の生き方についての全般的な指針を披露したもので、むしろ、「淑女の手引き書」(conduct book) に近いものである。そこでは、家庭生活こそ女性の本来的な活躍の場であり、その限られた世界でのみ女性はその影響力を広く効果的に発揮できること、女性の第一義的な義務は家庭を、その構成員、とりわけ夫にとって居心地の良いものにすることであった。教育は、そのような女性観に即して行われるべきであり、そこで実践される教育は、一般的な性質を帯びた基礎教育であり、専門的な知識を要求してはならないというものである。[42]

女子教育を職業との関連では決して論じないばかりか、女性の領域を家庭に限定し、社会的な活動を慈善や教会活動以外には認めようとしないこの保守的な言説の中に、＜ニュー・ウーマン＞ の姿を肯定的に見出すこと

は困難である。むしろ、それは、「ブルーストッキング派」として排除されている。サンドフォード夫人は、同趣旨のことを 1876 年公刊の、『若い女性のための人生読本』(*The Girls' Reading Book or Chapters on Home Work and Duties. 1876*) でも展開している。しかし、このような論を展開する女性自身の姿勢こそ＜ニュー・ウーマン＞の資質を表わすものだが、本人は意識していないようである。いずれにせよ、この種の反フェミニズム的言説は、19 世紀後半になっても執拗に繰り返されたが、その間にも、女性の教育を見直そうとする動きが少しずつ見え隠れするようになってくる。

2. エリザベス・ミッシング・シュエルの女子教育論

オックスフォード・ムーヴメントの影響を受け、少女向け物語『エイミー・ハーバート』(1844) を著した他、女子教育論や信仰上の著述のあるエリザベス・M・シュエル (Elizabeth Missing Sewell, 1815-1906) は、セント・ボニフェス・スクール女子学校を創設するなどして、ヴィクトリア朝の女子教育に貢献しており、彼女の女子教育論は、独自の色合いを持っている。『自然と啓示から得られた、上流階級の女子教育に適用される教育の原理』(*Principles of Education, Drawn from Nature and Revelation, and Applies to Female Education in the Upper Classes*, 1865) という長いタイトルを持った著書の中で、彼女は、伝統的な女子教育論——家庭の天使像の確認——をまず進める。サンドフォード夫人同様、キリスト教の教義と関連させながら、女性一般の性質を記述した後、女性の地位を社会と家庭の両面から確認する。「虚栄心」、「高慢」、「邪悪な気質」など、否定的な女性の性質を並べ立てるとともに、キリスト教の教義に準じた徳目（「愛」、「友情」）や信仰心の重要性を説いてゆく。

しかし、シュエルがサンドフォード夫人と異なる点は、「教授法の重要性」を認め、その改善を意図していることである。彼女は「教育

(education) は、教授法 (instruction) と明確に異なり、前者——心の訓練——は両親と関わるものであり、後者——知性の訓練——はガヴァネスが負うものである」[43] という一般的な議論に疑問を呈し、両者は離れがたく結び付いており、一方だけの教育の危険性に言及する。そのような女子教育を施せる機関を模索する中で、シュエルは、少人数の女子を教育する家庭学級及び少人数制の寄宿学校の設立を提唱する。それは、効率を狙った「監督生制度」(monitorial system) による低所得者の児童のための多人数教育を排除し、少人数教育を目指したものである。さらに、それは家庭の経済的な破綻に見舞われた中産階級の女性が、「社会的体面」を失わずに賃金を得るもう一つの方法でもあるとする。いわば、それは、ガヴァネス救済のために立ち上げられたクィーンズ・カレッジの小型版であり、したがって、ガヴァネスとも深く関わった教育問題となる。

ひとしきりガヴァネス論を展開した後、シュエルは女子の教育と男子の教育との違いを強調し、フェミニストが唱え出した男女共学論に反対する見解を述べる。[44] これは、サンドフォード夫人同様、男女の間の二重基準を認め、男女の生来の生物学的な差を認めることによって、教育の方法もまた自ずから違いがあることを主張したものである。このように、ガヴァネス教育への関心が、60 年代後半においても強かったということは、ガヴァネスの存在の重要性とともに、それが孕む危険性が顕在化してきたとも考えられる。メアリー・プーヴィーによれば、「[ガヴァネスの存在は] ヴィクトリア朝の二つの典型的な女性のタイプ——家庭の理想を表わす女性像とそれを破壊する危険を帯びた女性像——に極めて近いものであった」[45] という。なぜなら、ガヴァネスは、その仕事においては中産階級の母親の役割を演じるが、他方で労働者階級の女性の要素を持ち、給与の点では男性の要素を孕んでいるからである。その結果として、「理論的には男女の領域を守るべきであった存在が、両者の差を破壊する危険を孕む存在となった。」[46]

1840 年代においては、ガヴァネスは憐憫の対象であり、その救済は社会問題となり、「ガヴァネス互助協会」、さらにはその教育を目指したクィーンズ・カレッジの創設、そして女性の大学進出へと連結されたことは既に述べた通りである。しかし、60 年代後半には、その存在は家庭重視イデオロギーを揺さぶりかねない存在とみられるようになっていた。それは、ガヴァネスの社会的意味付けに孕んでいた曖昧さにあったであろうが、それを整理して、社会における有用な女性の知的な能力についての明確な議論を展開するには、まだ多くの障害が立ちはだかっていた。時代思潮を嗅ぎ分け、それを先取りする文学作品では、ブロンテ姉妹の作品に見られるように、ヒロインや反ヒロインとしてフェミニズム寄りの女性を登場させることができるが、現実の女子教育の議論は、現実社会が相手である以上、にわかに前衛的・革命的なものというわけにはゆかない。その議論は、堅実さ故に保守的な色合いを強くにじませている。

3. エミリ・シレフの女子教育論

保守的な女子教育論の中に、従来の ＜家庭の天使＞ 像や家庭重視イデオロギーを一部超えた議論を進め、具体的な教科目に言及しているのは、エミリ・シレフ (Emily Anne Eliza Shirreff, 1814-97) である。彼女は、『女子教育ユニオン・ジャーナル』(*Journal of the Women's Education Union*) を編纂し、女子教育論に一石を投じているし、1851 年には、妹のマリア・グレイと共著『女性の自己修養に寄せて』(*Thoughts on Self-Culture, Addressed to Women*) を出すなど、女子教育に関して論陣を張っていた。この 50 年代は、後に『イギリス女性評論』(*English Women's Review,* 1866-1910) に受け継がれることになる、『イギリス女性ジャーナル』(*English Women's Journal,* 1858-1866) が 1858 年に創刊されるなど、イギリスにおけるフェミニズムが顕在化した時代であるが、彼女もその波に乗って 1858 年に『知的教育

と、女性の性質と幸福に及ぼすその影響』(*Intellectual Education, and its Influence on the Character and Happiness of Women*) と題する教育論を発表している。そこでは、女子教育に関する一般論に加えて、具体的な履修科目などさまざまな局面を論じており、総体的に反フェミニズム的教育論の中で、女子教育に新たな光を投じる格好な資料を提出しているので、それを精査することによって、そこから読み取れる女性像と教育論の特徴を検証してみたい。

冒頭で彼女は、最近（1858 年前後）の教育上の混乱を指摘し、その原因を、教養教育と職業教育のそれぞれの目的が混同されている点に求めている。とくに女子教育のプリンシプルが混乱していると説く。知識を主体とする教育は、女子教育に不向きであるだけでなく、実際的価値をもたない、なぜなら女子にとっての教育は、男子の教育と違い、社会的・世俗的な価値と無縁だからという。シレフによれば、「女子教育の目的は、モラルと知的なものを組織的にバランスよく発展させること」[47] であるという。さらに、女子教育の本質的な価値は、物質的価値や表面的な価値にあるのではなく、モラルと知的修養のつながりにあるとする、典型的な教養教育を目指していることがわかる。

職業教育への反発は、逆に言えば、「女子雇用協会」などに見られた女子の職業への関心、あるいは非国教徒の間に広まった、商工業者の子弟向けの職業学校、「アカデミー」の実用主義・効率主義などへの反発もあったであろう。シフレがここで対象としたのは、ジェントルウーマン、その中でもガヴァネスとは違って、経済的困窮とは無縁な有閑ジェントルウーマンである。家内生産労働からも、また家事労働からも解放された上層中産階級の女性は、多くの閑暇を持つようになったが、それは、その社会の「パラファネイリア」であり、一般に認められたものである。しかし、シフレのように、有用性を拒否されたことに焦燥感を抱いたジェントルウー

マンがいたとしても不思議はない。彼女は次のように有閑婦人にとっての教育の重要性を語っている。

> 下層階級の人々は、必要以上の読み書き学習は不要だし、資産家は公人を目指さない限り、これも教育は不要であろう。また、養育と家事に関すること以外、女性も知識をあまり必要としないであろう。しかし、閑暇をもてあます女性こそ教育が必要なのだ------[彼女たちは] 家事・育児に専念しないと、ゴシップ、放埒、倦怠、愚行に走る危険性があるのだから。[48]

従来、上流階級の専売特許と目された「放埒」(frivolity) をはじめ、さまざまな悪徳が中産階級にまで及んでいるとの認識のもとに、シレフは、女性が社会的責任を果たす上での女子教育の必要性を説く。しかし、社会において実労働に参加しない女性が、教育を受けることによって、どのような形での社会参加が可能なのであろうか。また、男性との関係は、どのように捉えられているのか。競争社会で鎬を削っている男性たちに余裕がないとすれば、有り余る時間の有効利用ができるのは女性であり、「知識をマモンの召使にさせない存在、それが女性である」[49] として、シレフは同性への期待を語る。そこでは、男性優位を否定しないまでも、以前のように男性の優位性を無条件で認めるのではなく、むしろ、知的な領域においては無意識の内に男女の平等を要求している。

シレフが求める真の女子教育とは、「世俗的なものの獲得に価値をおく」のではなく、「人間の真の価値」を理解し認識できる教育、精神と心の涵養と修養、それが女子教育の目的であるとしている。この基本的な教育観に即して、シレフは、重要な教育形態として、「特殊な分野の知識の習得」を目指さない教育、つまり専門性を排除した教育、基礎教育を唱導する。

そして女子教育を、妻、母、地域社会の一員として、義務を果たすことのできる能力に見合った教育に限定する。女性の教育は、女性が一生の内で遭遇する困難を乗り越えられる能力の開発であり、道徳的知的な習慣の涵養であり、また、知識を探求する精神の開発である以上、男性が必要とするような専門的な知識は不要となり、学業期間も男子のそれほど長期にわたる必要はない。その期間は 12 歳から 18 歳まで、つまり、ジェントルウーマンとして社交界に出るまでである。この期間こそ、女性たちが生涯の性格を形成する時期なのだと言う。[50]

教育の目的を、自己開発や自己修養の手段に限定する一方で、シレフは、教科目とその効用について、詳細を極めた本格的なカリキュラム論を展開する。まず、主な科目として語学があげられ、古典語との対比の中で、外国語（フランス語、イタリア語、ドイツ語）学習の重要性が指摘される。もちろん、論理的思考や想像力に欠かせない現代語学習は、精神の修練となる文学作品の講読を含め、より重要な科目となる。歴史学習は、「人間の行動や動機、モラルや知的原理の機能とプロセスへの関心を深め、現在の問題を、歴史的スパンで判断する能力の育成に欠かせない」[51] としている。これらの教科目は、数学や自然科学の初歩とともに、40 年代後半にモーリスなどが説いたものであり、特に目新しさはないが、これらの科目を学習する年齢を特定している点、一歩踏み込んだ教育論となっている。

まず、12 歳以下の幼児の早期学習には、価値判断が十分でないとして反対した後、各年齢毎に科目と学習時間、さらにその効用について具体的に記述してゆく。12 歳から 14 歳における科目としては、大きく科学、言語、歴史に分ける。科学の中にはユークリッド幾何の初歩、言語では、文法、外国語（外国人による授業が望ましい）、作品朗読を含み、歴史では、時間的経過のみならず、地理的理解を徹底させることが提唱されている。12 歳から 14 歳までで新しい点は、科学、言語、歴史の各分野が学習科目と

なっているだけでなく、その間に体育の時間が入り、知的訓練と肉体的訓練のバランスが求められていることである。女子の必須科目である‘accomplishments’に言及はあるが、彼女の学習理念は、パブリック・スクールなどでの、男子の教育を意識していることがわかる。また、具体的な学習時間の設定、科目設定の目的の明確化・具体化（とりわけ歴史と言語に関する詳細な記述）など、抽象的な精神論に終らせない教育論となっている。

次に14歳から16歳では、まず学習時間が、5時間に延長（14歳以下では4時間程度）される。この年代では、さらに具体的に模範テキストの推薦まで行われており、教科目は、具体的に提示されるとともに、学習内容の高度化が図られ、同時に新たな科目も導入されている。新たな科目としては、博物学(natural history)が、著者名とテキスト名とともに紹介されている。語学では、ミルトンの詩だけでなく、アディソンやサー・ジョシュア・レノルズの批評論、さらにはジョンソンやラムの作品、英文学史のみならず、仏文学史や独文学史の講読というように、テキストのレベルが上がっている。読むだけでなく、ノートをとって考察や思考の能力を高めることも要求している。自然科学の科目としては、地質学、天文学それに動物学が、具体的なテキスト名とともに記述されるが、これらはあくまで初歩的なものに限ること、同時に複数の科目を学習すべきでないとしている。過重な負担をかけて、性格形成に支障を来たすことのないようにとの注意がなされており、女子教育が、単に知識の習得だけでないことを確認している。

次いで、16歳から18歳までの教育では、学習時間が1日6時間となるが、午後は、社交界との関係や父母との散歩、乗馬のために空けておく必要があるとしている。社交界デビューの準備が、学習内容にも影響を与え始めていることがわかる。そこで、自然科学や数学の時間は削られ、逆に、

歴史学習に力を入れ、その知識を、健全な判断力や価値観の養成に向けるような学習姿勢を求めている。さらに、アダム・スミスの『国富論』(*Wealth of Nation*) などのテキストを読み、経済学 (political economy) の初歩を学習し、政治と社会についての問題を考えることにより、男性の社会的活動に影響を与える必要があるという。社会、モラル、政治への知的関心を持つことは、影響力を持つ女性や教育に関心を払う女性の義務であり、任務であるとして、男性に対する知的影響力という女性の役割を、女子教育の最終段階での重要課題として強調する。[52]

興味深いのは、「懐疑的姿勢」(skepticism) を否定する中で、自己の意見を持ち、明確な判断力の養成を求めている点である。そのためには、倫理的哲学書や論理の手引き書を読み、的確で冷静な観察と論理的つながりなど、研究者的姿勢を維持すべきであると述べている。これは専門的な領域へ踏み込むことにつながるはずであるが、シレフは、それを意識していないようである。しかし、このように、女子教育を詳細に論じて行く過程で、シレフは、知的領域での女子の進出を仄めかしている。

シレフは、女子教育論を締めくくるにあたり、女性の位置付けに触れる。「男性が当然持つべき優位性を心に抱く女性は------道徳的堕落、つまり自分たちより劣る男性へ屈服したり、傾斜したり、あるいは本来的にも教育においても、優位性を認めえない者に生涯屈従するといった道徳的堕落から逃れるのだ」[53] と言って、女性が男性より劣っているとする伝統的な女性観は認める。しかし、だからといって、理不尽な家父長制や女性の価値を無視する行為は、男性にとっても不幸なことであるとして、女性からのサポートの重要性を力説する。そのためにも、女性の知的修養と涵養を高めることは、これまで以上に重要性を増しており、その時、男性と女性とは、「精神的な友愛関係」(spiritual companionship) を結ぶことができると言う。「社会が女性に求めているのは、労働ではなく、心の洗練と高揚であり、

知識は、道徳的影響力と健全な見解によってその力が発揮されねばならない。女性は、男性の啓発者であり若者の教育者なのだ」。[54] 一方で、男性の優位性を説きながら、シレフは他方で、両者の関係の平等を主張することで、女性の価値を高めようとしたり、男子の教育と女子のそれとの間に一線を引きながら、「高等教育が普及すればするほど、女性の洞察力は高まり、想像力は洗練され、共鳴の輪は広がるだろう」[55] と言う。女子教育論とジェンダー論の間には、矛盾した点が見られるように、シレフの女子教育論と女性の社会的な位置付けは揺れ動いている。

4. サラ・エリスの女子教育論

1830 年代～40 年代に「淑女の手引き書」(conduct books) を立て続けに書いたサラ・スティックニー・エリス (Sarah Stickney Ellis, 1779-1872) は、1869 年に『心の教育――女性の最高の仕事』(*The Education of Heart: Women's Best Work*) と題する女子教育論を著している。娘、妻、母親、それぞれの立場に置かれたイギリスの女性の使命に関して、既に一定の解答を与えたエリスが、30 年後にどのような女子教育を唱導したのであろうか。「女子教育」('Female Education') と題する第 1 章で、「以前は、結婚生活に入るための教育が女子教育の目的であったが、未婚で自力で生活せざるをえない女性の教育も考える必要が出てきた」[56] として、エリスは、女性が置かれた立場を、「家庭の天使」以外にも広げている。「社会が有効な職を彼女たち［未婚の女性たち］に提供するのに手を貸すなら、彼女たちは自立する機会を得て、恐れられるより、羨ましがられる存在になるだろう。」[57] そのような女性には、社会が適切な職を用意することだが、現状では不十分なのは明らかである。しかし、重要なことは、高等教育を受けたジェントルウーマンが体面を気にせず、社会にも自分にも有益な職に就いた時の心理的影響であり、それが確固としたものでなければ、どのような職種も価値

のないものになる、とエリスは言う。女子教育の目的は、そのような精神的な強さ、換言すれば、「強固な心」を持つ女性の育成にあるとする。これは「家庭の天使」像とは距離のある言説であり、30 年の間に女性観の変化を感じさせるものである。

このように、エリスは、特にジェントルウーマンの雇用に就いては抵抗を示さず、むしろ、それを前提として女子教育論を進めている。エリスの教育論は、他の女子教育論にしばしば見られるように、精神論へと向かいがちであるが、ここで、彼女が「女性の自立」に触れていることは、女性の地位という主題を考える上で興味深い。エリスは、女性の才能と性格には 2 種類――「優雅でやさしく且つ思慮深い女性、他は強い決断力と実行力に富んだ女性」――あり、特に後者の数が増えたことによって、教育は、従来とは違うものにならざるを得ないことを認めている。

> 以前は、結婚が女性の人生を決定付ける正当なものという理念があったし、教育は、その目的に合致しさえすればよかった。しかし、今日では様変わりしており、教育は、社会と直面し、自分の手や頭脳の力で体面を失わずに困難を克服しなければならない、多くの女性にも対応すべきである。[58]

したがって、現今の女子教育は、有閑のジェントルウーマンだけでなく、将来リスペクタブルな職に就く可能性のある「余分な女」たちへの対応も、教育の目的としなければならない。エリスの女子教育論は、女性の自立を認め、またその問題がしきりに議論されていることを認識した上で展開している。

しかし、「事実、女性の雇用が増える場合、問題はその職が難しいものかどうかより、彼女にとって快適か否かという点である」[59] と述べて、社会

的には女性の雇用問題と「社会的体面」(respectability) の問題との葛藤が、まだ解決されていないことを仄めかせている。エリスは、ジェントルウーマンにとって、職自体や階級のことが問題となるのではなく、零落したという意識のために心に傷を負うことが問題なのだと言って、女性の自立に立ちはだかる障害が、女性自身の意識の中に潜んでいることを指摘している。では、女性自身の意識に潜み、自立を妨げているものとは何か。「生活費を稼ぐことが堕落だと考えている間は、自立についての 'moral dignity' という 'principle' を理解する教育を受けていない女性にとって、[賃金労働は] 社会的認知を得ているとは思えないだろう」[60] とエリスは述べて、障害を乗り越えるための要件は、自立という概念への確固とした信念であると主張する。

さらに、「教育を受け、そのようなプリンシプル [integrity of principle] を抱いた上で、男が働く領域に出るなら、何のためらいも不満も感じる必要はない」と言って、女性の社会進出を勧め、「職に就いて給与を得ると、'tradeswoman' の地位へと落ちるといった社会的風潮をなくし、女性が生活する上で稼ぐことを社会が認知すべきである」と言う。したがって、ジェントルウーマンの教育は、「単なる知識修得よりも、正と善と偉大さを理解できる 'self-government' を修得すること」が大切であり、換言すれば、「心の教育」(education of heart) が重要であるとしている。[61]

このように、30 年前に「淑女の嗜み」について書いたエリスにとって、女性の自立と雇用問題は、今や避けて通れない問題となっていたが、それでも女子教育の根幹は、「心の教育」であり、その重要性は「教育者」(educator) としての母親に託されているとしている。「将来において子を教える立場に立つ女性のための教育、それが女子教育の最大の目標である」というエリスは、女性の自立と雇用の問題に触れながら、結局は母親として子供の教育に資する点を強調している。働く女性にエールを送りながら、

伝統的なジェントルウーマン像から抜けきらない姿をそこに見ることができる。

以上検証した 19 世紀のさまざまな女子教育論は、モーリスのそれを除けば、ジェントルウーマンを対象とした、ジェントルウーマンによる議論であるという点、また専門家によるものではなく、いわば素人によるものであるという点を特色としている。それは、彼女たちが属していた上層中産階級における女性像、ジューン・パーヴィスがいう「家庭重視のイデオロギー」に深く染まっていたことを意味する。それを裏書するように、検証したいずれの女子教育論も ＜家庭の天使＞ 像を否定した革新的な議論とは言いがたいものである。しかし同時に、個々の教育論は書かれた時代を背景としていることも明らかにしている。そこには、一見類似の議論が展開されているようで、実は微妙な差異が見出せる。事実、ガヴァネスの概念が当時から論争を巻き起こしていたように、女性像もまた一様なものでなく、複雑な様相を呈して揺れ動いていた。女子教育についても、レディの準備のための教育、'accomplishments' の習得に見る安易で表面的な教育内容などは、既に 19 世紀以前から批判の的であった。「トラクト」(tract) を数多く出版した福音主義者のハナ・モアは、1799 年には『女子教育批判』(*Strictures on Girls' Education*) を発表し、そのようなカリキュラムを批判している。しかし、興味深いのは、メアリ・ウルフトンクラフトが『女性の権利の擁護』の中で、女性の社会的地位を高める手段として、男女共学などの画期的教育法を提唱したことに対して、モアは反対していることである。[62] このことは、福音主義が、女性観に大きな影響を与えていたことを示すものと思われる。1830 年代～40 年代に書かれた「淑女の手引き書」(conduct books) もそれと無関係ではなく、女子教育論もまたその例外ではない。それを色濃く残しているのが、サンドフォードの『社会と家

庭における女性の性質』(1839 年) である。「女子教育の主目的は、キリスト教精神に即して女性本来の義務を果たす心構えを育成することである」と言い切った時、彼女に迷いはなかったであろう。カリキュラムに彼女が触れなかったのは、女子教育の内容が、既に一般化している 'accomplishments' 習得にあったから不必要と考えたと思われる。

女子教育に職業の概念が加わるようになったのは、ガヴァネスの問題と無縁ではないだろう。エリザベス・シュエルの女子教育論は、サンドフォードのそれと一部重複しながら、尚且つ女性の職業を睨みながら展開している。女子教育がもはや 'accomplishments' 習得では意味をなさないことを、シュエルは認識していたと思われる。女子教育と職業との関連を強調することは、女性の自立を目指すこととつながると予想されるが、現実には、シュエルは、<ニュー・ウーマン> の登場を期待しているわけではない。むしろ、見直しを迫られていた男女共学を否定し、少人数の女子教育を提案している。この形態の学校は、私塾的色合いのものであり、シュエルは、そのような場所でこそ宗教と道徳が融合した教育が可能であるとしている。彼女の女子教育論は、ガヴァネスの立場に配慮したものであるが、彼女たちの教育を論じてはいない。シュエルの女子教育論には、40 年代後半に既にモーリスによって唱導されたガヴァネス教育論の具体性はなく、サンドフォード夫人同様、男女の二重基準を認め、さらに男女共学の否定と極めて保守的色合いの強いものである。しかし、そのような姿勢を強調すること自体、現実社会では <ニュー・ウーマン> の存在が強く意識されていた証左とも言えよう。

男女の二重基準を認めつつ、女子の高等教育の意義を唱導したエミリー・シレフは、女子教育を別の観点から論じている。男子の優位性は、生物学的、時には医学的な見地からも主張されていた。「もし女性が専門的な書物を読むことに没頭する習慣を身につけたなら、英国民族は滅亡の危

険にさらされる」[63] といった大げさな警告は、その典型的な一例である。既に分析したシレフの「女子知的教育論」は、そういった見解への反論とも受け取れる。D. デイヴィッドは、そこで展開された議論が「曖昧な内容を含んでいる」[64] として、女子の高等教育に貢献したはずのシレフの保守的な姿勢に戸惑いをみせているが、彼女が教育を通しての女性の文化的義務を強調する時、それは、女性の本性の価値を高く評価することを意味していた。「公領域での戦いのために男たちは優しい感情、気高い理念を忘れがちである。これらの価値ある事柄を思い起こさせるのは、女性の文化的義務である」[65] という言葉は、確かに、男性の優位性を正当化する二重基準を追認するものだが、他方、女性の影響力の大きさの確認も求めているのだ。シレフが、男女は「精神的な友愛関係」を持つべきだと言った時、彼女は知的領域での女性の進出を主張している。伝統的なジェンダー論を踏まえながら、女子教育に期待をかけたシレフの女子教育論は、＜ニュー・ウーマン＞と＜家庭の天使＞像の間で揺れ動いている。

本論で扱った一連の女子教育論の中でも、サラ・エリスの議論は特に興味をそそる。というのも、彼女は、「自立」(independence) という語をキーワードにして、女性の社会進出を肯定しているからである。30 年前に「淑女の手引き書」を次々と世に出し、＜家庭の天使＞像の確立を目指した同じ人物が、「女子教育は、社会と直面し、自分の手と頭脳で体面を失わずに困難を克服しなければならない多くの女性にも対応すべき」[66] と言っている。しかし、ジェントルウーマンの雇用問題を軸に、女性の自立を促がすエリスは、他方、女子教育の目的を、「子供の教育者としての母親の資質」の修養に求めている。エリスの女子教育論には、女性の知の潜在能力を認識する一方で、その能力の有用性を家庭に託している。換言すれば、＜ニュー・ウーマン＞と＜家庭の天使＞像とが入り混じっており、＜ニュー・ウーマン＞の出現を阻止しようとするする言説の中に、＜ニュー・ウ

ーマン＞的姿勢をにじませるという矛盾が見られるのである。

ヴィクトリア朝の女性の地位の実態を確認する作業の中で、先行研究の検証とともに、復刻された当時の教育論そのものを精査した。検証した一連の女子教育論は、結果として、伝統的な「淑女の手引き書」の言説と重なる部分を多く持ちながら、女子の潜在能力への期待や願望を読み取ることを可能にする。それらは、＜家庭の天使＞像という枠と＜ニュー・ウーマン＞の狭間で不安定にバランスを保っていた。しかし、その枠を崩そうという姿勢が、世紀が進むにつれて顕在化していったことは言えるであろう。1880 年代には、女性の大学での学位取得が可能になるが、逆に反フェミニズム的運動もまた激しいものがあった。相互の闘いは、20 世紀にずれ込むことになる。

（本稿は、2001～2 年度成城大学特別共同研究の一環として草されたものである）

注

1. 吉田幸子・横山茂雄編『文学と女性』英宝社、2000 年、i 頁。
2. Sandora M. Gilbert & Susan Gubar, *The Madwoman in the Attic* (Yale University Press, 1979), xii.
3. 河村貞枝『イギリス近代フェミニズム運動の歴史像』明石書房、2001 年、23 頁。
4. See June Purvis, *A History of Women's Education in England* (Open University Press, 1991) Chapter 1.、邦訳香川せつ子『ヴィクトリア時代の女性と教育』ミネルヴァ書房、1991 年、1-12 頁。
5. Julia P. Brown, *A Reader's Guide to the Nineteenth-Century English Novel* (Macmillan, 1985), p.3.
6. See J. A. & Olive Banks, *Feminism and Family Planning in Victorian England* (Socken Books, 1964), pp.12-18., 邦訳河村貞枝『ヴィクトリア

時代の女性たち——フェミニズムと家族計画』創文社、1980 年、22-30 頁。同じく、河村、前掲書、25 頁、参照。

7. 佐賀裕実「ハナ・モアの女子教育」(『転換期の女たち』近代文芸社、2002 年)、30-61 頁、参照。

8. 川本静子「清く正しく優しく——手引き書の中の <家庭の天使> 像」(『女王陛下の時代』研究社、1996 年)、53-85 頁、参照。

9. See June Purvis, *op. cit.,* pp.1-10. 香川、1-12 頁。

10. See *ibid.,* p.4. 香川、3 頁。

11. J. S. Mill, *The Subjection of Women* (1869), repr. Everyman's 1954, p.233. 邦訳大内兵衛・大内節子『女性の解放』岩波文庫、60 頁。

12. 河村、前掲書、28 頁。

13. See Wanda F. Neff, *Victorian Working Women: A Historical and Literary Study of Women in British Industries and Professions, 1832-1850* (1929), repr. Frank Cass, 1966, p.187.

14. See J. A. & O. Banks, *op.cit.,* pp.28-30.

15. See M. Jeanne Peterson, 'The Vicrorian Governess: Status Incongruence in Family and Society', in T.R. Sarbin & K.E.Schribe (eds.), *Studies in Social Identity* (Praeger, 1983), pp.33-49.

16. Charlotte Brontë, *Jane Eyre,* Chapter 10.

17. W. M. Thackeray, *Vanity Fair,* Chapter 6.

18. *Ibid.,* Chapter 1.

19. See Daniel Pool, *What Jane Austen Ate and Charles Dickens Knew* (New York: Simon & Shusters, 1993), pp.224-226.

20. Peterson, *op. cit.,* p.35.

21. See *ibid.,* pp.36-37.

22. See *ibid.,* pp.37-38.

23. *Ibid.,* p.38.

24. J.K.Fielding (ed.), *The Speeches of Charles Dickens* (Harvester·Wheatsheaf, 1988), pp.65-67.

25. Peterson, *op. cit.,* p.45.

26. 後述するように、本論で用いる <ニュー・ウーマン> は、川本氏

による『<新しい女たち> の世紀末』(研究社)、1999 年や武田美保子氏の『<新しい女> の系譜』(彩流社)、2003 年で用いられている<新しい女> の概念とは異なることを断っておく。

27. See Peterson, *op. cit.,* pp.45-46.
28. 河村、前掲書、38-43 頁、参照。
29. J. F. D. Maurice, *Queen's College, London—Its Object and Methods* (1848), repr. Thoemmes Press, 2002, vol.2 p.5.
30. *Ibid.,* p.6.
31. *Ibid.,* p.8.
32. Pool, *op.cit.,* p.229.
33. *Ibid.,* p.234.
34. See Purvis, *op.cit.,* pp.97-99., 香川、136 頁。
35. E. Raikes, *Dorothea Beale of Cheltenham* (Constable Co.,1908), p.25. quoted in Purvis's *A History of Women's Education in England,* p.48., 香川、138 頁。
36. 川本、前掲書、46 頁。
37. James Davies, 'Female Education', *Quarterly Review,* no.119. quoted in Purvis's *A History of Women's Education in England,* p.89., 香川、142 頁。
38. See *ibid.,* p.98.
39. Elizabeth Sandford, *Woman, in her Social and Domestic Character* (Longman, 1839), repr. Thoemmess Press, 2002, vol.1 pp.93-94.
40. *Ibid.,* pp.2-3.
41. See *ibid.,* pp.171-185.
42. See *ibid.,* pp.186-193.
43. Elizabeth M. Sewell, *Principles of Education, Drawn from Nature and Revelation, and Applies to Female Education in the Upper Classes* (Longman, 1865), repr. Thoemmess Press. 2002, vol.5 p.206.
44. See *ibid.,* pp.213-217.
45. Mary Poovey, *Uneven Developments: The Ideological Work of Gender in Mid-Victorian England* (London: Viago, 1989), p.127. quoted in Patrocia Ingham's *The Language of Gender and Class* (Loutledge, 1996), p.50.

46. *Ibid.*, p.50.
47. Emily Anne Eliza Shirreff, *Intellectual Education, and Its Influence on Character and Happiness of Women* (John W. Parker and Son, 1858), repr. Thoemmes Press, 2002, vol.3 p.7.
48. *Ibid.*, p.23.
49. *Ibid.*, p.26.
50. See *ibid.*, pp.31-88.
51. *Ibid.*, p.75.
52. See *ibid.*, pp.385-391.
53. *Ibid.*, p.415.
54. *Ibid.*, p.416.
55. *Ibid.*, p.418.
56. Sarah Stickney Ellis, *Education of the Heart: Women's Best Work* (Hodder and Stoughton, 1869), repr. Thoemmes Press, 2002, vol.6 p.12.
57. *Ibid.*, p.14.
58. *Ibid.*, p.13.
59. *Ibid.*, p.15.
60. *Ibid.*, p.19.
61. See *ibid.*, pp.19-24.
62. ハナ・モアの女子教育論については *Strictures on the Modern System of Female Education, The Works of Hannah More*, vols.7 and 8 (London: T. Cadell Jun. and W. Davies, 1801) 参照。
63. Deirdre David, *Intellectual Women and Patriarchy—Harriet Martinau, Elizabeth Barrett Browning, George Eliot* (Cornell University Press, 1987), p.20.
64. *Ibid.*, p.20.
65. Shirreff, *op. cit.*, p.84.
66. Ellis, *op. cit.*, p.48.